

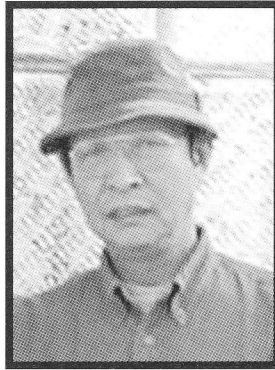
原 啓介君の逝去を悼む

昭和38年卒 河 口 精 二

啓介、お前とは大学入学以来からの付き合いだから、もう45年のつきあいになる。お前は経済学部、俺は工学部と学部は違ってはいたが、同じ航空部で空にあこがれてグライダーの練習をやる仲間として知り合った、お前はグライダーの操縦は下手くそで上級には進めなかった、しかし航空部仲間の何が気に入ったのか、卒業までずっと航空部に所属して、他では得られない友人関係が続けてきた、とりわけ、お前とは下宿が近いせいもあって随分と行き来をしたもんだ。俺の部屋はいつも清潔にしていたが、お前の部屋は万年床で、布団の周りはずっとワタぼこりが積っていた。そんな中でお前がたまに読む小説の中でも特に太宰治が好きで、わざわざ人間失格の道化師のような素振り演技をしていたのには笑われたよ、何しろ授業をサボってマージャンとパチンコに明け暮れていたのを知っていたから。

卒業してからもたまに飲みに行こうと約束しても、“悪い悪い、マージャンすることになったんで行けへんわ”と断ってきよる、と思うと、自分の会社で新しい事業を模索しているので、背広を買ってくれとか携帯電話を買ってくれとか、俺の会社の電話をこの電話会社のものに変えろとかあつかましいことを平然と頼んできよったなあ、それでもそんな屈託の無いところが憎めなくて、俺は何でも聞いてやったぞ、感謝しとるか。肺がんの治療で慈恵医大病院に入院しているときも、土日は先生も看護婦も相手にしてくれないので寂しいのか、何処かにドライブに連れて行けとか、退院してからも修善寺の俺の山に遊びに来たりとか、結構元気になっていたのに、癌の転移が見つかったも何とか負けずに戦っていたのに、……

三ヶ月ほど前かなあ、おれに電話をしてきた時、



平成15年12月2日 病没
ご遺族 妻、勝子 様

“おれの葬式のときに、友人代表で挨拶してくれよ”といってきた。“わかったわかった、あること無いことをいっばい言っついてやるから心配するな”と言っておいた、それがこんなに早く来るとは思わなかった、少し早や過ぎるよ、みんなそう思っているよ。

でもなあ、俺は命の永遠を信じている、何しろ一人の人間は60兆もの細胞から成り立っているらしい、これは全世界人口の60億のまだその一万倍にもなる膨大な数だ、そして、一人の人間のその一つ一つの細胞の中に、全く同じ記号で書かれた、30億の記号の羅列があるらしい、それによって顔かたちや性格や能力、そして人間の人間となるまでの何万年の歴史をも含めて記録されているらしい、そしてそんな細胞たちが一致協力して一人の人間を生かしているという、そんなすごいものが、過去から未来にわたって突然途切れて、無くなってしまうとはどうしても思えない、ある条件が満たされたら、同じ記号の羅列をしたDNAを持つ細胞が生まれ、また新しい生命として生まれてくるに決まっている、いつそんな機会にめぐり合うか分からないが、そんなに遠いものとは思わない。

またどこかで左肩を少し上げて、人生の虚無を装って、格好をつけた若者が居たらお前だと思って、また付き合っあげよ、お前には分からんだろうが俺にはすぐわかるぞ。

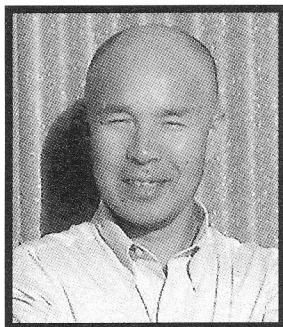
家族、親類、友人、みんな早い別れを悲しんでいるが、新しい啓介の出發と思っ送り出そう、そのまんまの啓介に又会えるに違いないよ。

原啓介君のご冥福を深くお祈りいたします。

友よ、

追悼 加藤芳也君

昭和39年卒同期一同



平成15年12月17日 病没
ご遺族 妻、美絵子 様

加藤芳也君さようなら、暫くお別れすることになったな。ご家族を愛し愛された君、仲間を愛し愛された君。そして、こよなく愛し愛された空に旅立った君。何時も明るい君の話し振りは簡潔で明晰、皆を納得させないことは無かった。私もいづれ君のいる空に行く。ゆっくり話をしような。

齊藤 良和

加藤芳也！ 第二の人生迄進まぬうちに再び滑空生活を始めたと思ったら、あれよあれよと思う間もなく急激にのめり込んで海外にまで出向いて飛んでいると聞いていたが、高度記録どころか、とうとう俗人が届かぬ天国迄も昇ってしまった。現世での滞空時間の記録を忘れたか。あゝロマンの、加藤芳也！

佐藤 忠昭

彼のラストフライト(平成15年9月7日)の後でくれたメールから彼を偲び、冥福を祈る。

「日曜日朝、倦怠感は強かったものの、お天気は良し、飛びに行った。久しく滞空してなかったから、内心今日こそはと思いつつ、B4で何とか1200mまで上がり、ゆったりと漂った。これだ

け浮いていれば本望とやがて着陸。82分飛んでいた。ほんと、久しぶりの滞空だった。まだまだ暑い、貴公も無理するなよ。病人に言われたくないか？」これから3ヶ月、平成15年12月17日彼は天に昇った。

鳥田 一英

加藤よ、貴様も又先を急ぐ！ いい加減にして早く降りて来い！ せっかちは昔からの悪いクセだ。死ぬ迄直らんぞ！ 彼岸フライトは俺たちには苦しくて、とてもそこまで上がれんよ。いい加減にして降りて来い。窪田もお前の腕にはもう勝てぬと脱帽してるんだぞー。そろそろ鳥田の勘忍袋の緒が切れる。山上奉行の鍋も始まるぞー。降りてこぬ気なら皆で先に一杯やるぞー 横原 俊二

「天保3年大飢饉…」この歌詞、同志社節最後のクライマックス個所である。誰だろう、芳也が部に持ち込んだ抱腹絶倒の歌である。合宿で、コンパで声張り上げて歌った。そこには何時も音頭を取る芳也の姿があった。もう一度歌いたかったこの歌。冥福を祈る。

青木 謙二郎

もう20年も前、私が原因不明の関節炎と潰瘍性大腸炎にかかり、車椅子生活を余儀なくされた時、君は家族ぐるみで我々家族を励ましてくれた。君が入院していることを知らなかったとは言え、何もしてあげられなくて申し訳ありません。今こうして生きていることの奇跡を大切にします。加藤君有難う。ご家族の皆さん有難う。 丹羽 正拓

友よ、仲間をおいて何故にそんなに先を急ぐんだ。約束したじゃないか、一緒に飛驒から南アルプスを飛ばうって、陸単の練習に苦しんだ八尾を

久しぶりに訪ねてみようって、それなのに何故？

俺は一体、誰と行けばいいんだよ。友よ、今日は何処の空を飛んでいるんだい？ 気流は静穏かい？ サーマルは出てるかい？ 俺が行くまで待ってるよ、このあわて者。 窪田 昌三

去年の今頃、たまたま思い立って電話するといつもの元気な加藤の声。だけど、聞いた話は仰天ものだった。糖尿病という共通点があり、数回のメールのやり取り。だけど、年も越さずに逝ってしまうなんて。名古屋の万博に行こうと言ったじゃないか。あまり、遠く迄行かずに近くのテルミックで待っていてくれ。そして、万博の会場で会おう。 山上 皓太朗

窪田からの突然の電話は、全く予想もしなかった加藤の訃報だった。翔友の「オジン奮闘記」での彼の飽くなき挑戦を読み、驚きと羨望の思いとともに、学生の頃の気性そのままだと懐かしく健在振りを確認していただけに、病気だったとは思ってもいなかった。まだ早すぎる！ 本当に残念だ。もっと手記の続きを読みたかった。

加藤よ、安らかに。 近藤 甲平

対面ス床上ノ君、瘦軀黙ス。常ヲ装ヘド茶毘ノ婦途不覚涙下ル。友誼四十余年。翔友誌上、君ノ青春再来ヲ知ルモ我問ウコトナシ、訪ウコトナシ。漸愧此レ真ノ友タリシカト。現今君往奈辺。君ガ含羞ノ眼顔褪セルコトナシ。栄国寺尊住ニ促サレ拙墨写経一典ヲ大徳ニ託サントス。我願意、安養ノ君ニ達クヤ達カザルヤ。コヒネガワクバ、ウケヨ。 豊浦 順真

これまで、訃報欄は1頁が慣例であったが、加藤芳也氏の追悼文は同期全員から寄せられたため、心を鬼にして削りに削ったが、皆さんの心情を慮ると、これ以上削るに忍びなく1頁以内に納めることが出来なかった。異例となってしまうことを、過去の訃報欄に掲載された故人と、その追悼文執筆筆者にお詫びし、ご了承を賜りたい。 編集長